

西安建築科技大学への派遣を終えて

海外出張報告 3

川島和彦



西安の中心部・南大街

日本大学理工学部と海外覚書提携校との学術交流覚書に基づく派遣教員として、2008年9月11日～25日の15日間、中国の西安建築科技大学に派遣された。通常は派遣期間1ヵ月間のところをその半分の期間で行くこととしたため、非常にタイトな生活をおくることとなったが、貴重な機会をいただくことができた。

今回の西安滞在中のスケジュールは、前半が西安での具体的な調査・研究内容の検討、中盤が大学での講義、後半は受け入れていただいた李志民教授と研究室の皆さんとの合同調査となった。

13の王朝が都を置いた西安は国家級の歴史文化名城に指定されている。日本との交流の歴史も深く、遣隋使や遣唐使が日本から派遣され、日本の文化などにも大きな影響を与えた都市として有名である。また、シルクロードの拠点としても有名であり、中国内に限らず世界中の観光客を集める都市でもある。急激な経済成長を遂げている中国は、歴史的な環境の保護・保全と開発とのほごまで多くの課題を抱えており、北京や上海などにおける本課題についての調査経験から、西安についても同様であろうとの認識をもって出発したが、ほぼ予想通りであった。長期的視点に立てば避けることはできない建築・都市の更新ではあるものの、それが急激に進みすぎた感は否めず保護計画との整合が図られておらず、そこに起因する問題が確認できた。

明代に築かれた西安城（城壁）が西安の中心に位置している。城壁がいわゆる中心市街地を完全に取り囲んでおり、これが西安の都市の骨格を形成している。西安市

の総合計画では、城壁に囲まれた地区（城内）の人口を2020年までに現在から4割減少させ25万人とし、また行政機関を城外に移すことにより、城内全体として密度を低減させることとしている。さらに、細かく高度規制を設けることによって高層建築物の乱立を防ぎ、歴史的景観の保全を図る計画がなされている。城内は歴史的な環境を守り、城壁外は経済発展に貢献していこうというスタンスであり、城壁からその外を見渡せば高層建築物が立ち並ぶ。今回の西安訪問では、歴史的な環境を保全していこうとしつつも多くの課題がある城壁内の地区を対象に、いかに建築や地区の更新を進めていくべきかについて、李志民教授と大学院生の皆さんとの議論のういで調査を行った。

現地に到着したら突然「授業をしてほしい」との依頼を受けた。想定外だったため日本にいる研究室の学生たちに資料を送ってもらったりして授業の準備をしたことは愉快的な記憶であるが、学生たちが真剣に授業に臨む姿勢には驚かされるものがあった。夜の講義であっても多くの学生たちで教室はあふれている、授業中はしっかりメモをとる、授業後は長時間になっても質問が出る……中国の今の成長の背景を垣間見ることができた気がした。

西安建築科技大学では、研究面では李志民教授や研究室の皆さん、生活面では国際関係のセクションの方々に非常にお世話になった。今後も引き続き学術交流、そして共同研究を推進していこうとの約束をして、帰国の途についた。関係者の皆さまに御礼申し上げます。

(かわしまかずひこ・専任講師)



中心市街地をとり囲む西安城（城壁）



近年の再開発エリア



李志民教授と大学院生との調査打ち合わせ